# 家傳史料

六

共十

文 傳

| 内閣文庫 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 類 | 和書 | 號 | 三五四四六 | 冊 | 一〇 |
| 函 | 一五五 | 架 | 一一五 | | |

（六ヤ）

備 史 閣

| 内閣文庫 | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和　35446 | |
| 册數 | 10（　6　） | |
| 函號 | 155 | 117 |

国立公文書館 National Archives of Japan

祕閣圖書之章

日本政府圖書

# 家傳史料巻之六

南畝子輯

孝子大橋貞涇傳

道灌公略譜

林家系譜

天野松平両家系譜 三州阿弥陀寺所藏

附 阿弥陀寺由来

銀座由緒書

御役塗由諸書

原氏先祖昏

閣
290

味知氏先祖書
百姓六藏
古文書写
蝦夷孝子カナブツ伝
右十一種

孝子大橋太二郎子伝

大橋太郎か子

筑紫に大橋太郎といひける大名ありけるを大将殿の（頼朝公）御勘気をかうむりて鎌倉由井の濱の土の籠にこめられて十二年まで押籠られてありけるに筑紫を出し時御前にむかひ弓矢をとる身となりて君の御勘気を蒙らんことは歎きにあらず又御前をとをくはなれ別し事は今別にまさりて本意なし其ときは男子にても女子にても一人もたざりけるをたゞならず懐妊のよし語りし程に女子にてやあらんまた男子にてや

内閣文庫

ゆらん行末をかんがへん事もとにかく覚えにくし
又彼人三歳にて父にはなれ母を尋ねて泣さけびけん
いかなりしにや力をもおぼえずして出ぬらんに
月日をへて行ほど身ひとつにて生れし男子にてありけり 一妙九後身経
七歳のとし山寺に登せてあつかれたる友達ありける
児ども親なくして生れ来けり家にかへりて母に父と
いひけり母宜つき方なくして泣より外の事なくて
あるとき此児申けるは天なくして雨ふらず地なく
して草木生せず候母ありとも父なくては
人となるべきぞ父のありかをば語り給へと
せめしかば母もかなしくて和児(わごぜ)が父を尋ねけるを
申さぬならばかならず此児なげくべしと
やがてさらば父の所在はかならず申さんと仰せしかば児よ
ありしこそ大橋の先祖の日記なりけり後の日なる
子に譲る自筆の物なりとて親来りて泣
より外の事なくしてさていかなせんといひつつけ児
よ師匠あまた伴せしかども此勘気と悲しかり
けるほどに故に散失ぬそのうち生てやあるらん

死てやあらん。菩提を人になし給ふなれ
これ(まれ)この泣く諫とも用ひさりけれは、母いつくとも
山寺に登らせけり。八親の孝養(カウ)のためなり。佛に花
香をもまいらせ、経をも一巻よみて孝養せよと
申せしかは、やかて山寺に登りて教のことく
昼夜に法華経をよみしかは、よろつの仏の
なさけを受て、あらたなり。さて十二の年出家
をとけ、やかてして髪を剃り、ほとなくして筑紫を
逃出て鎌倉へ下り、処々をめくりて八幡の御まえに

来て伏し礼して申しけるは、八幡大菩薩は日本
第十六代の主応神、霊山浄土にて法華経を説
給ひし尊き釈迦如来の御ことにてまします。経
観ハ生ても死しても成仏して、戌の時より法華
経を読く、寅の時まてよみ給ひけるに、とき(かきさ)
奇宝殿よりひかりかゝやき、心もとなく来りなり
多くの人もこれを見るに、八幡大菩薩人帝のことく
集りけれは、さまさまの人もそれやらん、又法師も
貴賤男女もありけるに、あるしも京の刑部の

二位殿此由聞召けるも人目を忍びて給けれとも
禅師のきこえ常よりもあはれなれはと仰ける中にも
此禅師ありけるかさて梶原も泣々おはしけるあはれの
おごりをとしたに人々をうけたまはる時大将殿へまゐり
ありし中にも語れなかしして梶原申して禅師
申すもまいらせ語ありさて次の日まで禅師此事あり
なれし西の方へ人さいきなり何あるまてに問し
今日召人の頸切るとの給ふなりあはれ我父は
今まで首つなかしもはねもさふらはん人の頸を切るとと

中セは家君のうけたまはりて泣く泣く涙くみてまかり
大将殿あやしと仰せしてわ児はいかにありけるそ
有のまゝに申せとありしは上件の事を一々
申けり此あまりなる大名小名ことの由を御袖
をしぼりけるなかに大将殿梶原を召して仰ありけるは
大将殿きこしめし此召人まいらせしとありしかは今
頸きらんとて此の禅へつかはしけるかね今は切てや
はらん又きらせてやはらんとおもひ候は此児
御おもひ候まてにも伏しまろひて泣けり大将殿

仰あり然ハ梶原親をとくいそぎ切られ候ハ　かくて
まいれとありしかは急ぎ由比の濱へ跪行くいまさ
いふもの有に呼ひたりけれはまゐりて頸きらんと太刀を
振上たりけるに何やらん梶原大橋太郎を縄付たり
ながら参りて大庭に引居ゑられけれは大将殿
此児をとらせましとありければ児を受取りて縄を
解たり大橋太郎ハ我子ともしらさりけれは
これもしらさりけれはさそ大将殿よりその後
此児を様々の御布施ありて大橋太郎とたふのこと　かくた

本領をも安堵ありけるとそ　下略

右　日蓮御書の中建治元年後三月二十四日南條殿御返事にみえたり又深草元政草山集巻十二豆州柏谷(カシヤ)六万部事縁起にも此事を引けり

覃按浪合記云

大橋家傳

其先祖ハ九州ノ守護大橋肥後守平貞能末葉也
肥後守ハ平家滅亡ノ後ハ肥後國大橋ト云所ニ蟄居ス

其後宇津宮ニ仕テ常州ニ赴キ生家ス又三河國
移テ住ス其所ヲ大橋トユフ然シテ後尾張國
熱田ニ潜居セリ時ニ農家ノ女二人ヲ妾トシテ
各二女ヲ生ス斯テ頼朝卿貞能ヲ尋シム尾張
國原大夫高春カ扶助スル由聞ヘケレハ梶原源太
景季ニ命シテ原カ城ヲ攻シム貞能自ラ景季カ
陣ニ行テ捕レ人トナル景季ハ貞能ヲ擒ヲレテ鎌
倉ニ帰ル即比企谷ノ土ノ牢ニ入ル貞能カ妻ノ
肥後國ニテ生ル男子一妙丸（後称貞経）父ノ生死ヲ

知ン為ニ鎌倉ニ下リテ鶴岡八幡宮ニ毎日毎夜
詣テ高声ノ法花経ヲ読誦シテ父事ヲ祈ルヿ
数月ニ及フ一妙丸カ容色尋常ノ人ト見ヘ子ハ
見ル人皆奇異ノ思ヒヲナセリ此叓ヲ頼朝々ノ
御臺所聞召テ教能卿ヘカクト語リ給フ頼朝々
即一妙丸ヲ召テ其意趣ヲ問レム一妙丸啼々
父ノ事ヲ詳ニ申上ル是ニ依テ教能卿憐愍アリテ
貞能カ命ヲ助テ又安堵ノ下文ヲ賜リテ九州ニ
帰サル是大友ノ元祖之

右孝子大橋氏之子一妙九後（貞侄）日本史孝子
傳及藤井懶斎本朝孝子傳共不收載
故一標出以補其逸　己未秋日
大田覃

# 道灌公略譜

太田左衛門大夫資長（或號持資）源光祿頼政十世孫備中守資清入道道真子也扇谷上杉修理大夫定正之家臣而住武州江戸城世称左金吾二千石（初名源六郎）薙髪號道灌春苑香月辭勝永享四年壬子生于相州幼雄偉不常父祖共奇之道灌十五歳時父資清曰汝客貌頴悟而如玉山映照人也古人曰智慧出有大僞智小而謀大無禍者鮮矣言行不可不慎也以譬談汝杉障子直則立曲則不立道灌退其席齎

屏風来曰是等直則不立曲則立道眞無言而入室内道灌素有大志而重名節於泰山軽死生於鴻毛故樂而有驕又道眞手自大書驕者不久四字而掛床頭令道灌讀之道灌即呵筆書其側曰不驕亦不久道眞大怒以扇打道灌又道眞作敎訓狀以授道灌正其言行之不善遂朝野許其能整風俗理文武
長祿元年丁丑使千代田齋田寶田三氏之家臣築城壘於武州江戸河越岩築矣
道灌平昔讀古今諸家兵書達於軍法之道而能知城壘之地故世称軍法師範自若年攻城圍邑戰功多常住武州江戸城城上置閒燕之室扁曰靜勝軒當其西簷有富士峯之雪其牕曰含雪江邊締小亭曰泊船摘字於浣花翁之詩句
道灌素屬扇谷定正之指呼以關東之八州爲已任定正保任之事無大小悉咨決焉故東關諸家八人寄心於道灌關以西之諸侯望風而靡者往往有之
道灌慕父風學和謌其平生所賦詠家集分其類題號碎玉類題

寛正年中道灌上洛謁源義政公公曰汝居武藏野有何風景耶道灌曰常看冨士峯未聞華洛有如此之壯觀也時人感其大言時勅使来問武藏野即詠和歌以答焉

露置奴方茂有計利夕立乃空与利廣𫝶武藏野濃原

勅使又問其平生之眺望時賦和歌

我庵波松原續𢦏海近〻不尽乃高根遠軒端仁楚見流

此時叡感有餘賜　御製

武藏野波高加屋耳度思志仁加〻流言葉乃花屋咲覧

應仁元年八月道灌引率軍兵到駿州合戰九月廿五日帰于武州

文明季中上洛謁源義政公時勅問角田川都鳥即賦倭歌以答焉

年經度我麻多志羅奴都鳥隅田川原仁宿波阿連共

造疑杌

道灌嘗攻小造城歟大勢也味方小勢也家臣等曰
以小難勝大道灌告諸士曰善用兵者不依兵之多
少不如乘勢吾以倭歌可進士卒皆應其聲進先登
遂應其聲進戰大勝抜其城

造疑杌

小造波先手習濃始仁天伊呂波仁保篇登知利
知利仁那流

文明六年六月十七日於江戸城招心敬等有倭歌之
會題曰江戸歌合

同八年八月使洛陽高僧南禅村菴蘭坡建仁天隠
正宗相國横川書江戸城静勝軒記

同年九月令湘山得公相陽中栄河陽東観書江亭
記其後使相國寺萬里建長寺玉隠竺雲書静勝軒
記凡五岳英僧来會于江戸城以賦詩文不暇毛舉
焉

同九年四月十三日於江古田道灌與豊島勘解由
某合戦

同年五月六日道灌率軍士赴上州是為救両将故
也

直下疑
有脱

同年十二月十日於總州堺根原道灌與長尾右衛
門尉景春相戰直臼井陣
同十年二月道灌攻成田某所守之小机寨
同年六月廿五日於江戸城内建三王權現堂荒神
祠菅丞相祠
同年秋道灌宴坐一室夢中見接菅丞相其翌早有
人卒然来献菅丞相所親筆之畫像可謂霊夢也遂
於城外之北畔建菅丞相祠堂湯嶋天神是也寄数十頃之
義田栽梅花數十株其側有亭扁號香月

同十二年両上杉長尾尾張守忠景太田道灌資長
等率軍兵攻長尾右衛門尉景春所守之秩父日野
両寨六月廿四日其要害没落
同十三年三月三日道灌招湘山五岳英僧有詩歌
會
同十八年七月廿六日入于相陽糟屋定正之舘卒
歳五十五即茶毗于秋山上糟屋洞昌院越生龍穩寺之末寺
也

岩渕浄勝寺者往昔
道灌公平常間讌之居地（址）也雖有行實之書依紛
失以家譜之大概寄附之者也
左金吾資長八代裔
太田大助源資賢
享保廿年乙卯七月廿六日

巖洞静勝寺八覧
筑波石正倚

懸雲磴
高頂花臺鎖洞門雙樹分仰觀攀磴者歩々亂層雲

圓通閣
寶殿徊翔處春光白日圓中塘何所有水暖出青蓮

灌公祠
千載称文武閟宮依翠微不愁陵谷變家世日光輝

梵鯨樓
經罷仰天南星辰低丙夜忽聽鐘自響知是霜初下

古城址
荒墟空草樹殘壘久莓苔徒見雲間雁行〻結陣回
棲寉壕
爽氣起周壕蒹葭多露裛西風傳寉唳却憶當年捷
靈龜池
滄池誰測底両岸迷秋卉風定芰荷揺應縁龜曳尾
蟠松岡
條幹蟠山背灌公曾自封于今風雨夕飛動老蒼龍

鐘銘
大日本國東海道武藏州豊嶋郡岩淵庄稲付村自
得山靜勝禅寺源三位頼政十世孫太田備中守資
清公者壽考八十餘而明應元年壬子二月二日卒
法名號自得院殿寶慶道眞大居士且資清公之適
子始太田源六郎末左衛門大夫資長公於此地卜
築城郭所構之舊基也於城中臨池有臺觀題靜勝
軒是灌公清心之定室也然資長公曽入相陽軍時
文明十八丙午暦七月廿六日壽考五十五歳而生

害法名號香月院殿春苑静勝道灌大居士則葬于
相陽秋山上糟屋洞昌院畢然後城郭亦就荒爲名
將陳跡雖然幸有萍水浮雲僧來於城跡結草庵改
静勝軒號道灌寺爲禪精舎然城跡皆歸村民之指
顧而存者無幾矣粤道灌公六世孫太田備中守資宗
公道顕大居士欲作祇樹園蒙 公許城跡皆附寺
而號以余名余正徳二年秋受太田備中守資重公
同氏隠岐守資良公二君之命被任住持職同四年
春繙大乘妙典教化四衆兼又擧大鐘造立之化村

民共善信溪揆禪要又捨淨資範銅鐘施之自得長
傳于不朽云云 前後省文
于時正徳五乙未暦孟春穀旦
前惣持當寺九世法雲活謹銘
太田源六郎資康公
太田大和守資高公
太田新六郎康資公
ハンカンフ 源六郎トアリ 武庵入道ト号
太田新六郎重政公
太田備中守資宗公
ハンカンフ 花叡ト号

太田摂津守資次公

太田摂津守資直公

太田備中守資重公

太田隠岐守資良公

自得院殿実慶道眞大居士俗名太田備中守
資清公

香月院殿春苑静勝°道灌大居士俗名始太田源六
郎末左衛門大夫資長公

藩翰譜本ニ又ハ持資　永享記ニ資長トアリ

右寛政六年甲寅四月　日同諸子遊稲付村静勝
寺請寺主而写之

天野 松平 両家系譜

此度御系圖御改ニ付當寺由緒記

写書記仕差上申候以上

寛政八丙辰年　阿弥陀寺

五月　廿二世

愛空

# 當寺大檀那御由緒記

三河國額田郡中山庄麻生村
應聲山即現院阿彌陀寺由来

人皇四十五代　聖武皇帝御宇天平九丁丑之秋行基菩薩諸國行脚シ玉イニテ富國段刀山ノ麓ニ行化シ玉フ處ニ毎夜五色ノ光明来テ菩薩ヲ照ス菩薩乃于光明ノイツル處ヲ尋玉ヒテ段刀山ノ西南額田郡麻生村金谷山ノ深谷杉木十圍ニ餘レルアリテ光明ヲ放ツ菩薩霊木ナルコトヲ

知テ則十一面觀音ノ像ヲ刻ミ一宇ヲ造建メ扁メ大金谷山西福院ト号シ觀音ヲ安置シ玉イテヨリ以来供給ヲコタラス数百歳ヲ経テ天台宗ノ僧侶誠賛坊住持スル處ニ應永元甲戌ノ春播州五箇庄法福寺ニ代教空龍藝上人當國遊化之時西福院誠賛坊皈依メ龍藝上人ヲ請シテ開基トシ天台宗ヲ改テ浄土真宗トナリテ大金谷山ノ号ヲ應聲山阿彌陀寺ト改ム是ヨリ先キ麻生ノ領主麻生内藏助逆意ヲ企テケルニ松平太郎左衛門尉親氏公是ヲセメ玉フ其後天文十年辛丑三月比志賀ノ城主奥平氏今川義元ニソムキコレニ依テ岡崎ヨリ此志賀ノ城ヲ襲此ノ時手合ニ先ツ當國額田郡大川村ノ領ノ主麻生藏太郎ヲ責メ玉フ先鋒ハ松平甚太郎軍将本多豊後守石川伯耆守同安藝守出張シテ金谷山ヲ本陣トシテ當山鎮守白山権現ニ奉幣有テ忽ニ麻生氏ヲ攻メ亡ス是ヨリ先キ嘉吉文安年間ニ天野藤左衛門尉長弘麻生村ヲ領シテ當山ヲ菩提所

トシテ武威長久ヲ祈シカ為ニ大般若経六百巻
仁王般若守護十六善神ヲ當山ニ寄附ス天野長
弘入道薙髪シテ性願ト号シ土村ニ隠居シ長弘
ノ長男天野彌九郎景孝同國額田郡岩戸村ノ領
主岩戸大膳亮恭親ヲ亡シテ之ヲ領ス然ルニ
天野景孝松平ノ幕下ニシタカハス依テツイニ
松平親忠公之ヲ亡(ホロボ)シ玉フ于時長享元年丁未ノ
八月ナリ此レヨリ世良田親忠公(右京亮亦左京進 ト号ス法名次下ニ記ス)
九男當國賀茂郡朧脵ノ城主松平源四郎彙清公

同長男源四良親正公同長男四郎右衛門尉清房
公同長男四郎右衛門尉正忠公麻生村城主トシ
テ代々當山ヲ菩提所トナシ再建シ玉フ時ニ正
忠公ハ
大神君ノ御家門故此志莊七村中山莊十村人数ヲ
カタラヒ大神君ノ幕下ニ属シ尾州蜷江ノ御
陣ニ出馬シテ敵将瀧川一益(カズマス)トカ戦シ遂ニ討死
シ玉フ時天正十二年甲申六月廿日也郎等小昌
又左衛門久廣主君正忠遺骸ヲ具足櫃ニ納奉肩

イ来テ當山奉葬
息男松平助九郎正秀公同二男松平助十郎正勝
公亡父菩提ノ爲ニ弘法大師彫刻彌陀ノ一尊寄
附シ玉フ則安置ノ本尊是ヨリ（委ハ本尊御身ノ後ニ記之）
（此時行基菩薩杉木彫刻ノ十一面観音ハ當社氏神ノ御正躰トス）
二男正勝公元和元年乙卯五月従 大神君
大坂御陣ノトキ青山伯耆守組子トシテ城兵
明石掃部助ト突戦シテ終ニ討死シ玉フ遺骸當
山ニ葬奉ル天野氏松平氏両家共ニ 當山ニ切ア
り永代墳墓靈牌設供拈香不可有懈怠者也爲後
人両家ノ系譜次下記大者也
寛永十七庚辰九月
當山拾壹世
哲岬叟壽賢誌之

南家藤氏ㇾ藤之後胤
天野式部大輔藤原遠景
元来天野氏多分右大将頼朝公ヨリノ昵近タリ
シカルニ天野氏鎌倉ヲタチシリソキシ其ユヱ
ハ数度武功有之者トイヘトモ感狀ヲ不給コト
ヲトシ依之本意ナク思フモノハ他國ニ流浪ス
トイヱリ

遠景十三代ノ孫

是ヨリ後数代足利家ニ随従数十通ノ感状ヲ所持ス

正貫　天野藤内左衛門尉

景貫　同　宮内右衛門尉

正盛　同　藤太郎

---

長弘　同　藤左衛門尉

長正　同　藤太夫

景吉

正善

異ニシテツノ上又御加恩ヲ蒙度由言上ス
コレニヨッテ　家康公イツハリトハ東ニ
知シ召サス御判物御證文クタシ置ル、
トコロニ遅テコレヲ信玄ヱ披露シテ
欺キタテマツルコト有欲仍テ御憤リ
アリテ乾ノ城ヲ大軍ヲモッテ攻メタマウ

三州麻生之城主
景孝　同彌九郎

景弘　同孫四郎

功景　同藤内

三州土村之領主
時弘　同孫太夫

三州土村之領主
正家　同孫三郎

正重　始ハ上村後岩戸之領主
同　彦右衛門尉

正時
同　孫左衛門尉

景信　三州岩戸之領主
同　孫太郎

正之　同國岩戸之領主
同　孫太郎

正弘　尾州ヱ移ル
同　彦右衛門尉

文明十七乙巳年四月廿五日
泰翁智山大禅定門　天野藤左衛門尉長弘

明應八己未年七月十四日
天光冷煇大禅定門　天野彌九郎景孝

天文五丙申年正月廿二日
隆昌院殿春山了興大居士　天野孫太夫時弘

天文二十二癸卯年五月廿日
光樹院殿映峯煇玉大居士　天野孫三郎正家

天正五丁丑年八月十三日
善哉院殿性應義海大居士天野彦右衛門尉正重

慶長五庚子年四月二十九日
忠良院殿勇譽仁廣大居士天野孫太郎景信

慶長七癸寅年十月十日
賢德院殿思功良齋大居士天野孫太郎正之

正保二乙酉年正月廿三日
高巖院殿義峯良仁大居士天野彦右衛門尉正弘

右ハ天野氏法名也

清和天皇 人王五十六代

貞純 桃園親王

経基 六孫王 始賜源姓

満仲 正一位下 左馬権頭

頼信 従四位下 河内守

頼義 正四位下 伊豫守

義家 正四位下 陸奥守

義國 式部輔 新田足利先祖

義重 新田大炊助贈鎮守府将軍法名方山上西禪定門 建保二甲戌年正月十四日葬 義重山大光院

義季 徳川四郎 徳川ノ祖

頼氏 三河守

教氏 世良田次郎

家時 世良田 文四郎

満義 世田孫三郎

政義 徳川右京亮

親季 徳川修理進

有親 徳川右京亮 法名長阿彌

親氏 松平御一代 清和天ノ皇御十六代 松平太郎左衛門尉法名芳樹院殿俊山徳應大居士 應永元甲戌年四月廿日葬 松平高月院

泰親 松平大郎左衛門尉法名祐金大居士 永享元己酉年九月廿日葬 松平高月院

信光 松平御三代 和泉守孫三郎左京亮名法信光大居士 長享二戊申年葬 岩津信光明寺

親忠 松平御四代 竹千代右京亮又左京進名法松安院殿大胤西忠大居士 明應九庚申年八月十日葬 岡崎大樹寺

長男 親長　岩津太郎

二男 乗元　松平源二郎

三男 長親　徳川治良三郎

四男 親房　松平弥八郎

五男 超誉上人　智恩院

親光　松平形部忠

長家　安祥左馬亮

張忠　松平左京亮

九男 乗清　三州瀧脇之城主初源治郎
松平加右衛門尉

御両家之御元祖
此御方也

嫡 瀧脇之城主
親正　松平源四郎

二男
乗遠　松平三郎大夫　有系別

女子二人

嫡 三州麻生之城主
清房　松平四郎右衛門尉

二男 阿弥陀寺七代
等賢上人　松平源之丞

三男
正乗　松平久大夫　有系別

四男
忠久　松平新助

女子三人

嫡 麻生之城主
正忠　松平四郎右衛門尉

二男
房勝　松平又四郎

浅草西福寺ニ被為在候中興御建立被遊候御石塔ト申ハ此御方ニテ御座候

女子二人

嫡 正秀 松平助九郎

江戸御引移り
松平織部様、御元祖

二男 正勝 麻生之城主 松平助十郎

江戸御引移り
松平丹後守様 御元祖

女子二人 於千代

法號无記之

松平御尽代親忠公九男當國瀧脇之城主松平源四郎乗清
應幽覺院殿谷譽郷音天大居士
大永六丙戌年三月十九日葬當山

當同瀧脇之城主松平源四郎親正
源泉院殿桃岳了法大居士
天文十九庚戌年十一月二日葬當山

當國麻生之城主松平四郎右衛門尉清房
松光院殿風譽音法大居士
享祿三庚寅年三月十四日葬當山

當國麻生之城主松平四郎右衛門尉正忠於尾州蟹江ニテ討死

即現院殿深譽生西大居士

天正十二甲申年六月廿日葬當山

松平助九郎正秀京都ニテ遊入

清光院殿秋覺浄雲大居士

寛永十一甲戌年八月二日葬當山

當國麻生之城主松平助十郎正勝大坂ニテ討死

金谷院殿鉄道勇劔大禪定門

元和元乙卯年五月八日葬當山

乘清之室

證月院殿得光貞生大信女

永正五戊辰年二月廿五日

親正之室

貞松院殿節月浄讃大信女

弘治元乙卯年十月十日

清房之室

忍柔院殿和光貞操大信女

弘治四戊午年正月七日

正忠之室江戸ニテ逝ス
融智院殿光譽慧照大信女
元和庚申年九月廿八日

正勝妹於十代江戸ニテ逝ス
明源院殿峻山智鏡大信女
寛永十癸酉年九月十日

正秀長男松平小太夫勝秀
松光院殿風譽道吟大居士
寛永二丙午年九月三日

正保二酉歳五月　當山現住　壽賢記之

国立公文書館
National Archives of Japan

秤座由緒書

往古ゟ自秤仕不相定諸国秤出入極出来不申候故秤之儀

通用仕国々秤之位不同ニ付諸国一途ニ被為 思召

権現様ゟ以天正六七年五月秤座御取建被為遊先祖

吉兵衛人ニ被為仰付守随として秤位上中下無之一文字

其一文字大黒極印ホし申候

御上洛之処大黒極印之秤一統名高為御座候保町人

大黒屋常是と申もの吹人ニ被定追之吹之天下一統

太閤様御代慶長年之銀通用之儀ハ

一右之通ニ世上通用仕候者灰吹銀并ニ所々堀出之銀集
追之銀座ニ而被下候御吟味之上ニ而慶長年之銀吹立候
右ニ吟味之上銀之儀ハ佐渡銀出灰吹銀しかし慶長銀之
吹立之上銀座ニ而集メ銀として三ヶ年程ニ仕候而御仰付
壱万貫目程ニ而年々銀座ニ而上ル又銀座一体ニ而相済
候ニ付右ニ灰吹銀之歩一統世上不残集候灰吹銀を慶長
銀之様ニ吹立申候諸人を申付重ねて右ニ銀ニ而取扱之儀被仰付
別段ニ被仰付候所無御座候

一右世上灰吹并諸山ゟ掘出候灰吹銀とも銀座ニ買集メ
通用銀ニ吹立余銀之内ニ而御運上銀納仕候定之慶長十六
亥年銀座ニ而被建以来今以年々買灰吹ニ而御運上銀納
ニ而右年納仕候

権現様
台徳院様
御代ゟ年頭載今以而相勤仕来候
御定高座ニ

一銀座之儀京初ハ伏見ニ而被建其後銀座銀座ニ而被建

一其余役人住居地両替町屋敷四町拝領仕居候所へ相渡

候後慶長十一午年於駿府両替町屋敷四町拝領住居銀座

相建伏見之者共も引越候方ニ御座候 右銀座は於駿府之ニ其余引越し

此役所相建候町屋敷今以所持仕罷在候

一慶長十三申年伏見之御役所を京都へ引移被為成

京都室町通之烏丸通之間二条ゟ三条迄四町拝領

御座候 右ニ付此役所相建役人住居仕候

一慶長十七子年於江戸銀座御取建御座候ニ付駿府銀座役所を

江戸江引移被為成 右付通町京橋ゟ南之四町町屋敷拝領

罷在候処其後上ケ地ニ成替地被下置当時京橋新両替町同

前ニ而ハ此役所相建役人共住居も仕候得共当時ハ 京橋ゟ

南ニ銀座壱町目同弐町目同三町目同四町目と唱申候

一於大坂高麗橋筋東壱町目同弐町屋敷拝領仕候因

慶長銀吹替之為銀座御役所相建候間右之通今以相続仕

罷在候

一於長崎町屋敷拝領仕銀座御役所相建異国之御渡銀

并長崎御年行事銀改之御用相勤り候儀ニ付

御付京都ゟ銀座役人之者今以勤番交代仕罷在候

一銀座諸伺等之儀ハ先達而被仰付候
吉勤来候処寛永七午年ゟ御留守居年寄方ゟ支配ニ
被成候寛文年中ニも御老中方ゟ御知書を以被仰付其後
元禄二巳年ゟ当付之通り御勘定ゟ支配ニ被成候

一銀座之者年頭八朔暑寒歳暮継目之節一同御礼
御目見仕来り候之節白銀献上仕候年頭御礼之節京都ゟ
参候節紅絹献上仕
御目見 御礼申上候ニ付者被為 節ニ白銀献上仕候
天和年中ゟ 御時服拝領仕候勘定役之者共迄

御時服拝領仕候得共今以
御代替 将軍 宣下之節も年頭之節御時服拝領仕候

一年頭之節ニ麻上下着用罷出候並月次御礼之
御目見仕趣出仕之節者御老中方御宿ニ御来席之節
申候

一年頭之儀銀座構之節振舞仕候 御用達ニ勘定役并
平役之内ゟ追々年頭役人被召 御用被仰付候
常初若年之内平役ゟ出勤仕勤功ニ随ひ御勘定并年寄
年寄役ゟ五個所ニ相渡以後御役儀昇進申候ニ付年寄役之儀も

右役之ものゟ承知仕
御勝手御勘定御奉行方御引足高ニ付御役後老中方御通掛
御勘定御奉行方ニ而合之御礼申上候其後役儀継目為
御礼御本丸被之仕
御目見仕候儀
権現様御上覧之節ゟ相勤候者組屋人ニ而御時ニも相勤年来
一 往古ゟ御代官兼帯組頭ニ而役儀相勤候者も有之年数役
之相勤平役之者ゟ之御由緒之者ニ而其御役勤候御代之
継目御礼承御節相續仕来ルゟ天和年中之年頭御礼

仕之処同三亥年町人一統年頭御礼御停止被仰出候後ハ
道中并出火之節前断年頭御礼仕候
右之通ニ御座候以上
安永八亥年五月
組屋年寄
田中佐左衛門
長谷川太兵衛
屋布左衛門

組頭人数書

覚

宝暦十二午年十二月十一日被仰付

明和二酉年八月廿一日 〃

安永六酉年十一月廿六日 〃

寛延三午年 二月十五日被仰付

已下 居久

年寄

平井保左衛門

長谷川七之丞

庄田吉左衛門

大勘定役

安藤恬亮

岸部六左衛門

庄田太左衛門

京都役人

横田十左衛門

明和元申年七月十九日被仰付

佐藤三左衛門

小南宗左衛門

中村源右衛門

秋田太右衛門

江戸住居在中

戸棚勘定役

宇野六之丞

江戸住宅住居

田上助左衛門

浦江庄左衛門

佐倉宗左衛門

安永二巳年正月　御徒目付

平野勘右衛門

表役人
久米平右衛門

江戸住居仕度
蔭山八左衛門

長谷川伊三郎

徳倉重之丞

戸棚役
尾林与助

江戸住居仕度
長岡吾八

表役人
末成金右衛門

牧野七右衛門

長尾七郎右衛門

永田嘉右衛門

長谷川七左衛門

高橋半兵衛

江戸住居仕度
平役
平野貞右衛門

尾形新八

伊丹安兵衛

安藤清八郎

安永当年二月十七日出死
之不君

岩瀬熊次郎
野村利兵衛　二十未
岩瀬粂次郎
呉源左衛門
平野七郎兵衛　二十未
日比文右衛門
春吉太郎
京都住人
駒井操之丞
後藤覚之助
平野治兵衛

京都住人
宇野弥三郎
江州住人
平野原之助
小西定治郎
菊村清次
玉村常右衛門
江戸住居住賀子
細谷六兵衛
新井宇定子
中根上右衛門　戌十九未
京都住人
中村吉蔵
同所
後藤清兵衛
江戸住居住賀子
中村九郎右衛門

宝暦十辰年　上段

昇君

江戸住居仕候
細谷五郎九郎

湯浅万三郎

江戸住居仕候
尾西源之助

京都住人
下村亀次郎

〆西組六人
内弐人父子勤

太々外

長振男役

川瀬庄九郎

金谷彦九郎

川瀬仁左衛門

権川源十郎

日下部甚右衛門

宝暦七丑年　出勤

昇君

手振男役

久保八三郎

庄司清八

辻伝之丞

川瀬茂八

金谷彦十郎

上谷清吉

鴻谷八之助

西村利之丞

林九一郎

安村岩次郎

安永六酉年九月廿九日平留江被仰付

寛延元辰年九月廿日太日引

右之通ニ御座候以上

荻田銀右衛門
鴻谷伴次郎
古沢利平
利根音右衛門
泉谷治郎左衛門
唐牝久兵衛
〆郡惣拾壱人　内三人ハ当勤

京常是
江戸常是

作兵衛実子
大黒作太夫
長左衛門実子
大黒長左衛門
〆弐人

戌十二月

平野作左衛門
尾本吉左衛門

安永八亥年
朱座人数書　肩書 年付男之

京両替町　年寄　尾本市八郎

同　〃　京屋源蔵

同両替町　同　菊村八右衛門

同　同　下村甚之助

京両替町　来役　尾本右衛門

京両替町　同　山口米助

〆六人

右之通相違無御座候以上

亥十二月

同勤役
朱座年寄
下村甚之助　印

御役塗師由緒書

権現様従　御代々忠勤相勤代々江切米御役所方江金別段ニ
御年公相勤来り申候内別而御塗物細工被仰付候ニ付
諸　仰付甚之例年正月御例之御塗物御役塗師
仰付相勤申候甚兵衛左衛門佐兵衛相勤候ニ付御役塗師漆候
御細工人扶持方米漆紙布御下行并炭代
定置候得共木工ニ而細工之義ニ付諸色　御用之節
請取相勤申候御勤定被太郎兵衛殿江仕上　右之通
御役塗師共相勤申候

右之外御役儀ニ而去年迄之者荷(?)候分之義御座候
其時々御座敷義合之節茶相勤申候
泰徳院様 御代ゟ有之通相勤来申候 御細工所
先頭掃部殿御申渡年々御役儀御用無之有之候諸色細工
是又前之御渡候ものゝ御召無之者共御渡之下有之候
其上迄之者諸色小屋之茶請丸御中請計請丸御役儀御用
相勤申候ニ付諸渡有之年 御用ニ是ゟ請家廉之者共
請丸諸色細工ニ付諸色之其節々自分之入用之分相調
御役儀御用相勤申候 大勘定ゟ 先頭掃部殿ゟ 仕立候
右之外御役儀ニ茶(?)御座候 荷(?)候分之節之通

此儀相勤候
大猷院様 御代ゟ右之通御諸請丸御役儀御用相勤申候
此節分御勘定所渡之分諸色方諸色細工之諸御勘定
而(?)之節之御勘定仕相済候 是又三年御用ニ是ゟ諸
御諸請丸御役儀ニ付相勤 年々御役儀御渡物御用
者共ニ而添附之用之分ニ御諸別之御渡計下之節之通
細工是又諸色御渡計下候 其節之中級拵方
者御渡之計下 御難儀之御渡ニ付右様之御諸
諸色御渡之候 先頭掃部殿ゟ年 御渡御定之

被相勤候ニ付 御膳掛り御減し被相勤候ニ付御用之節ハ相勤候外
御役料被下相勤候 右之通其外 御膳掛り御減し被相勤候文
細工之者共之義ハ入用之品調之上細工人 且又料理并
雑用諸品御賄方任右御膳掛り諸色共是迄之通 御賄方
御用相勤申候

右之外御賄方ゟ品々付 并修理御膳掛り之次
先規之通被仰付相勤候
御誕生之御用之外御用并御用之節并修理之御用
御役料等被下候

厳有院様 御代ゟ先規之通御賄方御用諸品諸色前々之通
相勤候

右之外御賄方ゟ品々并修理御膳掛り之次先規之通
被仰付御役料等被下相勤候

常憲院様 御代ゟも先規之通御賄方御用相勤候処
二十七年以前巳之年御細工所御膳所之儀ニ付被
大付之儀御勤被成候御賄方付候入用御吟味之上品々
たへ之通被仰付毎日御賄方之者御用細工之品御細工細工
承知候又方并当分出方永井十右衛門方之人宛御付置
朝晩御掛役所之御吟味相極り先規之通細工之儀ハ備文
之通其外細工人并料理人雑用品ニ付御賄方任御膳
之人宛百石程稲或ハ二百俵宛ニ而被下 御減し候以来迄

其外相続御役漆相勤来候処元禄十一寅年ゟ右之通り
漆相勤候処 御付候得共 御割合ニ減候ニ付 而又十五年
以前之通十月ゟ右御役漆付候得共 御割合ニ罷成候 壱ヶ年ニ
漆百五拾桶宛御役漆被仰付候 就而者 配分ニ請負仕候様ニ
相続候而者 前方御定法之通御勤定之 何も相済候上年々連名を以
相済候上ニ 三四年之割合百五拾桶ニ請負 御役漆御用
相勤候

右之外御役漆之儀 年々御調達ニ付 御用御飛脚料
先規之通 相勤候

文照院様 御代ゟ先規之通 御役漆御用相勤候

右之外御役漆之儀 年々御調達ニ付 御用御飛脚料
先規之通相勤候

有章院様 御代ゟ右之通 御役漆御用相勤来候処 太
御役漆之儀 中絶無之 御役漆ゟ御飛脚料代相渡候ニ付 御尋ニ付
引合御役漆之儀ニ付 委細之書付 稲垣対馬守様へ
御役之節 御尋ニ付 右之御用之儀 御細書付 御勘定衆へ
御書付を以 其御役 久世大和守様ゟ 御細書付を以 被仰付候
御書付被仰下

享保元年申十二月

奈良七佐 印
栗本篠河 印
埴本(?) 印

萱田甚左衛門
栗本忍之丞
根本文左衛門
太田勘左衛門

後藤庄三郎役人 十七人
同所京都ニ罷在候分 十一人
同所佐州ニ罷在候分 八人
後藤庄三郎手代金座人
年寄 四人
細工役 三人
勘定役 十一人
平役 十七人
同所京都ニ罷在候金座人
年寄 六人
細工役 四人
同所佐州金座人不罷在候
勘定役 八人
平役 二十八人
同所佐州金座人京都ニ罷在候

七人
日々飛脚所々取集
此外使番
引 人

一 出知行相給候覚

一 高祖父　本国生国信濃　原彦九郎

信州佐久郡岩村田ニ住居仕候所

権現様甲斐府ニ御出馬之砌信州惣小県氏之一味

仕候ニ付而処々百姓九年以前天正十壬午年芦田

右衛門佐方ニ御書被成下候へ共下々之者共申合候付

仕付候ニ付右同出来ニ村之奥ヘ入候所小屋ニ罷籠

其上岩村田之者共此者方ニ仕合右衛門佐方ニ

内通仕候ニ付而芦田之一味仕候其小屋ニ籠之難成

指揮送り付候て其節ゟ右宮之岩村田之城に
火を掛焼払芦田と一所ニ而籠城之城を攻落励
軍功出来申候其上信州御手ニ入申以後芦田
右馬佐殿下ニ而知行三拾八貫文被下右馬佐殿跡
申付候以後百三十年以前慶長五庚子年七月
権現様
上意ニ而芦田組之者共於信州生国ニ而申合
出来候ニ付て出合被仰出則先知之通其節
三拾八貫文於上州中宗宗村ニ而下置候
一 曽祖父
原吉左衛門
父之庄左衛門家督ニ而被仰付知行不中宗宗村住居
仕罷在候
台徳院様ニ御奉公申上 上意ニ而駿河大納言様ニ被為付出仕
相勤申知行三拾八貫文並ニ御蔵米三拾俵五人扶持ニ而下置
御奉公相勤申候
一 祖父
原太左衛門
駿河大納言殿ニ而則小十人組仕大納言殿御仕舞以後
大猷院様ニ而召出則知行三拾八貫文寛永十六卯年武州幡羅
之郡 小机領西八幡村ニ而被下住居

一 父　　　　　　原左兵衛

父原左兵衛儀下金剛冨士見御宝蔵番被仰付寛文元年
以来相勤元禄四未年病死仕候
拙者儀父原左兵衛跡式下金剛冨士見御宝蔵番被仰付
当年迄九年相勤罷在候以上

元禄十三年辰四月

冨士見御宝蔵番松浦八郎兵衛組
原広左衛門（花押）

松浦八郎兵衛殿

一 先祖之由緒書上之事

駿州庵原村 三浦味知

一 権現様江御奉公申上隠居仕候付駿州庵原より
罷出候者拾人組ニ被召出仕諸役御免之者ニ御座候

先祖
味知雅楽助

一 権現様江御小性御奉公申上候

雅楽助子
三浦忠左衛門

一 権現様江御小性御奉公申上候

雅楽助子
三浦新助

権現様御他界以後紀伊大納言様江御奉公申上

大学源左衛門と申候唯今悴大学孫太郎と

申 中納言様江御奉公申上候

一 権現様江御目見江御奉公申上駿府屋敷ニ而病死仕候

雅楽之助名紀
祖父 味知弥平次

一 大猷院様江御奉公申上只今迄 御本丸御留守居

御番仕居候

駿府屋敷ニ而病死仕候
松平新兵衛人ニ而申候

甚兵衛子
伯父 三浦八兵衛

甚兵衛名紀
父 味知十左衛門

一 館林様江 五家御小姓組ニ而御奉公申上ニ病死仕候

十左衛門子
兄 三浦京右衛門

天和二年
子二月十日

駿州庵原村十左衛門名紀
味知衛之丞 印

御代官様

一 寛政十年午年十月
小石川大〻番町百姓六藏所持
地面廻之書上写

此段以書付申上候

一小石川火之番町地守百姓六兵衛儀先年右地面
拝領仕候訳地面之訳御尋ニ付左ニ申上候
右六兵衛五代以前延宝年中六兵衛親役名
不知諱今之儀組藪田太三郎之儀ニ而
常憲院様
御臺様江御膳番ニ而奉公仕罷在候処同八申年

七月廿日病死仕候得共其節ニ致し子細不相知諸式不
相違之儀ニ付其節六兵衛母為助力ニ而罷越居附
罷在候後去ル巳年度ゝ中間共ニ引取申候処主人
後見度々不知子細ニ而仕置候ニ付作付之節
罷在候後之者ニ候是又聊之恩愛を罷在候岩之聞候
大病ニ而流罪ニ被仰付候処翌年ニ至り赦免
為之人居六兵衛方ニ而致候所不残引取候処
捨ケ年程相立六兵衛母儀老衰渡世難成申候

件六兵衛儀江戸地へ罷越候て右年数ニ
度候て及延ニ六兵衛百姓ニ而参り候ニ付而
主人之後見致名主中之不残候所大病
無之然ル所ニ御奉公申上候処又ゝ右母
連而罷越候ニ付右年数ニ候主人之儀も
此者共ニ六兵衛儀相続仕候一所ニ而母を
介抱ニ仕候而右ニ付此者共中ニ
被仰付ニ付而其外共ニ罷在

不知稲生下野守様御役所ゟ石高ハ委
細ニ知レ不申候尤其節稲葉斎宮殿也且
御徳元禄九子年六月細井九左衛門様御代官
所武州豊嶋郡千駄谷村之内高拾弐石七斗
九升村並之通御年貢ハ其納高役諸役も
御免除ニ而永代ニ下置候御証文有之候得ハ
紀延同年十一月御改高之内七石五斗四升八
九合御廟所御用地ニ被下置同十巳年小石川村

谷中村之内ニ而代地ニ被下置候其後年月
不知谷中片町ニ千保ニ被差上候処
常憲院様御霊屋御用地ニ被召上龍泉寺を
中之地ニ相渡り代地下之内ニ御渡ニ而ハ細
右代地不存寄代地当代り御伝高之内
小石川大之当町ニ千保ニ被差上場所御除
ニ被下ニ而右居延之処其年月不知
町家ニ被成御免地致外寺社奉行ニ之宅

佐前弓之様本多弾正少弼様為居屋敷替被
安藤長門守様江茂右之通被仰渡候処
八御役名不知大久保加賀守様へ町屋敷儀
御免被有候ニ付武蔵屋造作御拝借仕度候
書付差上候処其以後年月并不知新
規町屋被返し置候而御当所ニ申候
不相知町御奉行所へ名主共へ組合　相立
町並之役等相勤候様被仰渡御請仕申候

右御尋ニ付申上候指ヶ谷町前天明八申年
三月私居宅類焼之節従古来之書留諸帳面
焼失仕候ニ付委細之儀一向相知不申候ニ付
六ヶ敷御尋ニ候得共申上候以上

寛政十午年十月

指ヶ谷町之内
小石川大塚町
名主　吉蔵

町
御会所

六蔵畑徳須
御除地文写

覚

武州豊嶋郡
千駄ヶ谷村之内

一高拾四石七斗九升

此反別四町四反六畝拾歩

此訳

下田 九畝拾九歩 石盛六斗

下畑 四町三反六畝廿六歩 石盛四斗

右之私領代官所或ハ寺社領村之内ニ有之土地
度々御用地ニ相成候ハ残地村高結百姓ニ預ヶ置
御年貢諸役申付置候処元地役目付迄差出候
召仕候者ゟ書面之田地不残被下置候処
被仰渡候旨ニ而穢多縁治候而ハ先年惣代差出
仰付世悴之人大嶋ニ流罪ニ處若年ニ而被成
加力仕候穢多共ゟ借り請ニ而被差延穢多
無是非過世話成候ニ付 世悴穢多非人引取地ニ

此度之旨寺社役所願之通穢多ゟ差出候ニ付被仰付
穢多共ニ人之義難有感激合申之不申候旨被仰聞候ニ付大嶋
年之後勤候ニ而主人被成下置候後ニ右
無違ゟ穢多此度旨寺社主人之義も少ヶ所
穢多義相違無之所ニ付差無之様可相成様被仰付候
之旨被仰渡右之通
上ゟ穢多相成申候間此度穢多義ニ付右地ニ
穢多之儀ニ付其寺特之願候ニ付無為
相抱右之田地永代被下置候旨被仰渡候ニ付

諸役村並之御年貢ニ為出納ニ掛り諸役
等之儀先除下付之旨ニ付被成候右田畑従
当子年六ケ年為ニ付之諸役之御免之儀
御證文ニ付候以上

元禄九子年六月

御勘定所

細井九左衛門

裏書

表書之通方御代官所武州多摩郡岩村内
田畑之内指置屋敷七拾九坪此段六歳ニ永代
寄附之旨御老中ニ被仰渡候ニ付從当子年
右田地ニ而被渡候村並之年貢ニ付
之掛り諸役等まて御免除ニ相成候者也文之
旨之候以上

子六月

諸　傳左衛門

荻　彦次郎

井　志摩守判

稲　下野守判

松　美濃守判

右御證文我等方へ出雲守写し遣申候

元禄九年子六月

細　九左衛門判

元禄九子年　地方帳

一　高九万三百八石壱斗壱合壱夕九才

細井九左衛門
武範

此内拾三万三百六拾四石五斗余　御蔵入分

但高百石ニ付壱合宛

是ハ浅草蔵方為御用金私代官当高九万三千石此皆

四拾四石弐斗壱升六合壱夕九才之内三石九斗七升

様右高四拾六石五斗五升七合市谷村高大屋
并当村火消人足役相勤候ニ付御年貢諸役
御免百六十六石五斗八升四合目黒総浦高
三百四拾八石五斗八升十四合中野御用地高
弐石壱斗二升二合四合御厩除役并ニ
高弐石七斗七升六合六勺 森伯耆守高
中之弐地高七斗半迄七石ゟ漢策斎円上
ニ付抱屋鋪之者拝借地高拾四石七斗九升
六升御中者之 子年田地ゟ下諸役御免九石壱斗
壱升弐升 七合并奥并仮高四分当子ゟ御出来

并新規上知ニ付子年ゟ除之 八百廿石壱石
三斗七升八合 武州今井村篠津村五町
蓋村吉田新田泥亀新田 御勘定組新田
水損ニ付当子年ゟ御免 三千弐百弐拾四石
三斗四升三合六勺七才 武州中野村
高内亀井村角筈村中野四ケ谷両村御囲
犬ニ付御検定人相勤御囲急御用ニ付
相勤候ニ付当子年ゟ御免 三千百四十石五斗
壱升八合 東海道御伝馬高定 石除
高合七千九百九拾八石四斗弐升 弐合 九才

七弐引し

元禄八亥年
高八万九千七百八拾弐石弐斗五升弐合
五勺弐才

古書物写

先祖酒井彦四郎儀塚越九右衛門と苗字相改慶長八巳年

注 正保御徒方大井甚三郎組ニ成ル

右彦四郎儀上州ニノ宮塚越村ニ閑居住いたし候ニ付

御当家ニ 正保御中御徒酒井ヲ塚越と相改候旨 悴共

酒井ニ而被仰付候 順慶大火ニ而諸書物焼失

いたし 其上ニ而書聞無之 申伝候も相知れ不申 且紋所ハ

丸ノ内 ... 要名ハ次ノ字代々用来申候

覚 母方先祖書付

一 高祖康豊後宮方ニ梶原源太後裔なる由申伝

一 陣場絡場書ヲ致候ニ組頭絡場の由

一 高祖康豊の後宮ニ梶原源太後家へ五月十五日の

状を申伝

一　高橋康忠殿方ゟ立合証拠手ニ而状有之候

一　高橋康平右衛門方ゟ太田彦六方へ状有之候

一　同平左衛門ゟ輙定ゟ参状有之候

一　宛不十郎殿ゟ遣し状有之候

一　高橋康彦次郎方ゟ参ル手付有之候

一　志摩いの次郎手ニ而くいの次郎の手付

一　次郎兵衛同人手付ニ人数集ル手付有之候

一　豊田同人同平作之方手付共ニ候入道共之
有之候遣し

一　平山彦太郎方ゟ京八左衛門ゟ参ル状有之候

〆　拾四通遣し之ゟ

於従源右衛門　重右判形　清九

右に證

加村越中飯豊豊後豊前守ゟ今泉

分但此ヶ里をしは布里云ゟ忠信志留

地てハ在置はたへ譲之

永禄八乙丑六月廿一日　三楽斎

道誉判

高麻井常陸守殿

於追鶴之岡田居之拾貫文之所
令寄進之候　謹言
丙寅
壬六月廿二日
源太
政宗書判
高藤兵部少輔殿

加増田中分并先代豊前守分令
宗指仕置之所并下地之
（此字不分明ニ）
番西信之晋地下之所之　謹言
永禄十二己巳壬五月十五日
政宗判
高藤兵部少輔殿

高平殿　源女

此度為原城被誅以大勢取囲之和泉閣し
時も両亜中被成入道并ニ籠居し
中ニ罷居候処延中延意之由向化とも
人静ニ平る中形被遣て義深中

しとき深遣て

十二月九日

高平殿

源女
京資判

右乃詞御書ニ明白也私下ニ此事
他人ニ不可見為

沛同名兵部丞才知行并家風事
之旨任先来不可有相違候者委細細谷
大炊助可申候謹言

十二月廿八日　太田長六
　　　　　　　資長判

高藤康平右衛門殿

同名兵部丞知行并家風事
任先判中不可有相違候也

六月十六日　能定判

高藤康平右衛門殿

相続之儀無相違可有之者也

候也

下野守以前之任先例令沙汰候

不背以来以使者不申届候

武州浅草之領分總寺先例可被致

如前々可令進退候依如件

各々無余儀節用ニ候得共申上候
幾度も以長絶云乱ニ入道も定而
この色恰兵ニ之也令穣量ニ候也
被下候被致様御尽力候以様申
捕候――以く

今日之揉肝悪しく候ハ難題之趣申
し仕舞振り無御座不申付候儀
成のへくハ日中之被致候ハ事を
あまりくしくハいまんや趣申候
無之し仕舞申て乗風当候ハ堅加様

当御身一ツ之儀と一軍計下知仕
又かゝりニ極候ニ存寄候へとも尤
被申付候迄ハ於我か用心専ニて大
ゝ之覚悟有之候ハ備ニ及ハ申間敷
きく候ニ

十郎殿

平山虎太郎様　人々御中　原　八之進

一 大坂御合戦七日ニ先度小荷駄請番ニ而
候處文馬之轡ヲ取御陣場ニかけ付候き
然所既敗軍之時分馳付候者之様子見
御馬ニ付候儀者無之様ニ承及能思召候

書中

一 当陣江罷出、其城之儀相守候由

寄合之辛労察入候、仍時分柄之儀、万事上

御油断有間敷候、其城之儀堅固ニ相守候

與州境目何方も其旨可申候

其合可申候、委細一書并使者可申候

四月二日

家康判

駿河大納言殿御用ニ付而駿府江

被仰付候処ニ早々参着神妙候

就其人馬之滞なく肝要ニ候

可相届力を以可申候

寅

八月

胡筑後守判

為古徳　判

石戸　吉川少之清殿へ
名口
関　喜之丞殿へ
不来卿　手嶋平六殿江
素名　山根宇右衛門殿江
池鍬鍛　吉田道伯老江
呂倚　上田清兵衛殿江
奥屋宗運老江

在川　天野九郎右衛門殿
吉田　清須屋七左衛門殿江

伝馬壱疋人足弐拾人（御朱印下）人
伏見ゟ甲州郡内迄下
可出之如件
慶長十六年卯月廿六日
大和守

[illegible]

豊田村

[illegible]村

平村

中[illegible]

[illegible]

[illegible]村

[illegible]

南

西

北

湯反

ひおとし

平山村

二八幡林

岩清ひらの山内

志のさくら

鞍骨山

熊地寺山

あふの内

指福寺

豊田村

ふいこう

宝蔵坊

石黒下

平村

三原内村

あいの内

中屋敷

ひのさう

越坂

谷村

くらのさく

町屋五兵衛

くら川

不動堂山

田村

別府家

三田村

新井屋敷

湯沢

神くらせん地

三原村

河内村

石田屋敷

同

河内村

越前地

岩子谷

藤河村

蔵人下新井宮

上キ守前代

次男やふ八兵衛

新井八兵衛

三沢村

湯坂

西

平山村

三八幡林

藤沢村

岩清水山内

正月十三日於高畑不動堂名字

中座衆之御事

右

高麗山城守　二連八あかいの村

高麗平左衛門　二連八ことの田村

高麗道白守　二連八みさ八の村

田中源六　二通ハ山保家のこ

右

高藤左衛門　二通ハ和くの原村

高藤織部丞　二通ハかゝら村

平山越後守　二通ハ谷の木村

高藤勘解由　二通ハ秋之谷門

仍状　二通ハ左馬允に

永禄十年丁卯十月十八日　資満判

廣瀬郎殿

三甲いの源秀

二階堂殿

山口殿

今泉殿

吉田源三郎殿

疋田殿

吉田縫三郎殿
三田殿
塩谷平太郎殿
春日源三郎殿
加藤源右衛門殿
大庭三之守殿

春日摂津守殿
塩谷勝之助殿
河目越前守
細谷刑部左衛門尉
濱野淡路守
馬場

志やいの次第

冨士宮内少輔殿

足立宮内少輔殿

源次郎殿

くとう殿

垣屋越前殿

高椋中務丞殿

曽我孫左衛門殿

松田彦七郎殿

沼田殿

金子大炊助殿

中村周防守殿

駒田内匠助殿
太田下野守殿
柏原上総守
河目相模守
河口乃監
福嶋帰右衛門尉
以上

次第不同
羽生右京亮殿
飯嶋玄蕃允殿
同内匠助殿
飯嶋肥後守殿

同 彩二郎殿
雨谷七右衛門殿
宍 勘負殿
宍 對馬守殿
菱沼丹後守殿
本田豊右衛門尉殿

同 隠岐守殿
上曽陸奥守殿
河目右馬助殿
菅戸勘解由殿
揖斐但馬守殿
同 与右衛門殿

同　与一殿
村上隼之丞殿
小笠原稲殿
同右馬之助殿
宇都木源左衛門尉殿
秋庭佐渡守殿

同　正左馬助殿
大貫紀伊守殿
池田若狭守殿
横倉式部丞殿
宇都木出羽守殿
同　新吉殿

亀井伊勢守殿
同 隠岐守殿
根岸又右衛門殿
和田右衛門尉殿
高梨近江守
高梨若次郎

乃村壱岐殿
田村帯刀
同 久作
同 七郎五郎
長瀬右衛門
三輪物造

同　式部左衛門

同　右京亮

同　源五左衛門

松本兵部大輔殿

弓削治部大輔殿

大橋将監殿

同　左近将監殿

西尾伊予守

同　善四郎

古宇田志摩守

奥野左衛門尉殿

上木式部左衛門殿

前嶋平次左衛門殿

右ハ鳴巣先生清書也　同人本名ハ雨森芳洲之祖男ニ
而御座候　古人之能筆ニ而三郎ニ而
筋目ハ分りん根　仕哉宇被中　傳ハ根本ニ勇　二人相之
一向筋目無之候へとも和見候得倒
何分可然奉頼候

鳴巣左衛門殿
関雅楽助殿
仲丸彌太夫
冥加記

カナブツ

カナブツは東蝦夷地アツケシの酋長にして七十歳なり性沈黙静和にして父母に事ふその妻嘗て魚を漁りに捕ふに誤て溺死す爾来独居娶らずあるひは漁事を為し或は樵蘇をなし辛苦甚だ極り夷人

或ハ後妻を娶らんとするを勸むすれハ同く
ゑひ父母と居るもまたとも自ら振ふるまさ
りけり況やよく妻を娶らんや而して婦人の性
善不善識ぬ知る所なからずとしあるハ
娶る所の妻をして心醜悪なりしは則ち
父母の供養清くもりおはしまさとなるせんやその

こころ其母眼を病む夫婚ことことく薬の
限く療すへきたらしめしとも百方警救子
折思慮深く母をして平癒を得るに至り
しめとまと至孝の感するなりといふし
其の平生必ず盡思竭力みなる此類なり
郡縣中の夫積譽して置かず後漢書を

きく在番（アツケシの役吏吉田十／戸田又太夫）するより志達を
國家に言し賞賛して以て甚孝を顕
はすといふ

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan